

令和4年のご挨拶 寒中お見舞い申し上げます

ゆたあ〜と

発行
小国公立病院
0967-46-3111
おぐに老人保健施設
0967-46-6111
訪問看護ステーション
0967-46-6050

49号
令和4年2月

小国公立病院
HPアドレス
<http://www.ogunihp.or.jp/bind/>


『令和4年を迎えて』

病院長 堀江英親

早くも今年も1カ月過ぎてしまいました。1月3日に小国に出てきて、その後は、小国から殆ど出ていません。ジョギングで南小国町に少し出たくらい。昨年末は新型コロナウイルス感染症から少しは解放されるかなと思っていたのに、まだまだ捕まっています。

感染者の増減に関しては、ちよつと予測がつかませんが、そのうち新たな平穏な日常がやってくることでしょう。いろいろな不安や不満はあるかもしれませんが、順番が来たらワクチン接種は受けておいた方が良いでしょう。

当院は熊本県の指導を仰ぎながら、県下の病院と協力し感染症対策を行ってきました。

『ウェルビーイング』を支える病院を目指して 病院事業管理者 片岡恵一郎

昨年もコロナ一色の年だった様に思いますが、コロナの話はもう飽き飽きと思いますので、今回の私のご挨拶からは省かせていただきます。

最近、マイブームの言葉は「ウェルビーイング」です。英語では「well-being」で、直訳すると「よい状態で存在する」という意味になります。健康な状態も、病気や障害がある状態も多様性の一つと捉えると、その人なりの多様な「well-being」な状態が存在します。他者との比較ではなく、命が途切れるその時までその人らしい「well-being」である人生を支えるのが地域医療の大きな役割であると最近感じています。

北里柴三郎先生は、日本の予防医学の祖ともいえます。100年以上も前に、医学の本質は病気を治すことのみならず、病気にならない様に予防することである、というその時代としては、かなり先進的なコンセプトを提唱されていたのは、天才としか言えません。そして、そのコンセプトに日本の社会がやっと追いつき、2021年の政府の骨太の方針に「ウェルビーイング」という言葉が初めて使われ、日本の国策の一部に組み込まれました。

現代の新しい予防医療の定義は「ウェルビーイングの状態から転落しない様にする」ことです。生まれてから人生の終焉までの、多様な世代のウェルビーイングを支援できる地域の病院を目指していきたいと思ひます。



対策用の病床確保のため、一般の病床数が制限され、地域の方にはご心配をおかけしております。これからも地域医療の維持に努める覚悟でございますので、引き続き、ご理解、ご支援の程よろしくお願い致します。また、何かありましたらご意見、ご指導いただけますと幸いです。

私事です。この頃はマラソン大会も軒並み中止となり、走らず、体力も衰えを感じています。今シーズンは、スピンバイク買いました。エアロバイクのちよつとこいつやっです。乗るだけだとすぐ飽きますが、動画やバーチャル画像をみながら漕ぎます。出かけなくて済むので、皆さんも、工夫して巣ごもり生活をお楽しみください。

新職員紹介



うえむら しのぶ
上村 忍 薬剤師

令和4年1月1日付け勤務となりました。八代出身で、学生時代は熊本で過ごし、現在は福岡県久留米市に籍をおいています。縁あって、一昨年2月の1ヶ月間、こちらでお仕事をさせて頂きました。小国の方々とのふれ、有意義な時間を過ごしたところが私にとって貴重な経験となり、今回戻って参りました。私のモットーは「明るく、元気!」です。小国の医療従事者の一人として、医療の充実、向上に貢献できるよう努めます。



体験 24時間 血糖値モニター「リブレ」を装着して ～在宅医療とIT化～

検査科 有住将尚 臨床検査技師 (小国郷糖尿病対策チームブルー・リーダー)

先日、阿蘇郡市地域多職種連携研修会に参加し、アボット(Abbott)社製の「リブレ」という医療機器を2週間装着することになりました。腕にセンサーを装着して、24時間血糖値をモニタリングする装置です。



腕に装着したセンサーはお風呂など水に濡れても良いようになっており、特に普段の生活に支障はございません。

血糖値はスマートフォンや専用機器を用いることで管理しますが、今回私はスマートフォンで管理することにしました。



当たり前ですが、食後は血糖が上昇します。この日内変動がグラフで表示されることで、一日の血糖値の上下を意識することができます。また、低血糖などのイベントアラームや血糖値から推測される

HbA1c値算出もできるようです。

このリブレはスマートフォンのアプリで管理する事で、あらかじめ指定されている医療施設と血糖値のデータが共有する事ができます。この為、ご自身で手帳などに記録する必要がございません。つまり、血糖値のIT化ともいえます。

私が現時点で把握している限り、体重や血圧などもIT化ができています。アップルウォッチなどは心拍数だけでなく、不整脈まで検出することができます。こういった医療分野でのIT化は今後どんどん普及するであろうと、実感することができました。

特に、地域医療が抱える問題に対しては、IT化が問題解決の重要なツールになることは疑う余地はなさそうですが、スマートフォンなどのITツールをどこまで使いこなせるかが、今後の課題ではないでしょうか？




スマホでの管理画面

FreeStyle LibreLink

過去24時間

100%	116	120
------	-----	-----

センサー残りで残り14日

クリスマス会、盛り上がりました



最初は皆さん、何のゲーム？と戸惑っていましたが、間違い探しだとわかると、真剣な眼差しになり、次々と声が上がってきました。変装している職員の名前を叫んだりする利用者様もいらっしゃいました。



1回目
さて、何が変化してるのかな？



令和3年12月22日に、恒例となった「クリスマス会」を開催しました。去年に引き続き、感染予防のため外部の方々の参加はご遠慮頂き、職員による余興で利用者様に楽しんで頂きました。

今年の余興は、観覧するだけでなく、脳トレしながら楽しめる「リアル 間違い探し!!」。1回目と2回目、どこが変化したかをみんで探すゲームを行いました。



利用者がご本人にクジを引いてもらい、プレゼントを手渡し。さあ、何が入っていたのでしょうか。たくさん笑顔がこぼれたのクリスマス会となりました。

シリーズ 柴三郎先生の薫り ⑤ 北里柴三郎先生とノーベル賞

病院事業管理者 片岡恵一郎



「ノーベル賞」という単語を耳にしたことは何度もあるでしょうが、みなさんはこの賞にどのようなイメージをお持ちでしょうか？
ノーベル賞は、ダイナマイトを発明した、アルフレッド・ノーベルさんの遺言で1901年から始まった世界的な偉業を称えて送られる賞です。これまでに日本人でノーベル賞を受賞した人の数は29名。このうち医学に関係のある生理学・医学賞は5名が受賞しています(表)。

ただいたのは記憶に新しいでしょう。柴三郎先生のスピリッツを引き継ぐ北里研究所での業績が歴史に深く刻まれました。



この5名中3名の研究は北里柴三郎先生の業績と大きく関与しています。柴三郎先生はノーベル賞の受賞こそされませんでした。単発のノーベル賞以上の価値を医学界に残されたといえます。今回はそのお話をしましょう。

最も近く、ノーベル生理学・医学賞を受賞されたのは、2018年の本庶佑先生です。受賞テーマは「免疫チェックポイント阻害因子の発見とがん治療への応用」です。わかりにくいと思いますが、癌の発生に関係するタンパク質をみつけて、それに関係する「薬」の癌への効果を証明されました。いわゆる新しい作用の「抗がん剤」ですが、みなさんにお伝えしたいのは、この薬の正体が「抗体」であるということです。柴三郎先生の発見した血清療法は、突き詰めていくと、癌の治療にも応用可能なものであることが、100年以上も後に本庶先生によって証明され、ノーベル賞受賞となりました。

時は、1890年、柴三郎先生は嫌気性菌である破傷風菌の培養方法を発見し、その存在を明らかにしただけでなく、血清療法という人類史上に大きく貢献していく治療法を発見しました。この血清(抗毒素)を用いる治療法の発見は、破傷風だけではなく広範囲の病気の治療に応用が可能で、今後の医学の発展に大きく寄与していくことは、専門家の間では想像に難くありません。実際にコッホ研究所では、破傷風に続いて、ジフテリアの治療に血清療法を応用したところ、絶大な効果があることが証明され、ドイツ人のベーリングと柴三郎先生の連名で論文文化しました。この功績が認められ、1901年の第1回ノーベル生理学・医学賞はベーリング博士に与えられました…。

癌以外の分野でも、現在大問題の新型コロナウイルス感染症、関節リウマチ、膠原病、アレルギー性疾患などに、抗体による治療が応用されています。「抗体医薬品」といわれるものは、これまでに日本で認可されているものだけでも70種類以上あり、これまでは治療が困難であった難病に対する治療薬が大部分となっています。

「!?!」ちょっとおかしいと思われませんか？
血のにじむような努力の末、血清療法を発見し、研究を主導していたのは柴三郎先生です。そう、ご存知の方も多いと思いますが、柴三郎先生は第1回のノーベル賞候補としてノミネートされています。しかし、ヨーロッパ発の記念すべき第1回の賞を日本人に与えるのは、当時はかなりハードルが高いものだったと推測します。実際、1920年代に日本人の山極勝三郎がノーベル賞にノミネートされた時に、選考委員会で「東洋人にはノーベル賞は早すぎる」との発言があったことも明らかになっているそうです。

人類が抗体を自在に操り、安全に人間の体に投与できるようになるまでに、100年以上もの年月と、世界中の多くの研究者の力が必要でした。しかし、その源流をたどると、柴三郎先生の“破傷風の血清療法発見”に繋がるということは、日本人として誇るべきことだと思います。柴三郎先生に感謝と尊敬の念を抱きながら、小国公立病院でもコロナ感染症の治療に「抗体医薬品」を使わせていただいています。

時代が移り、日本人で初めてノーベル生理学・医学賞を受賞されたのは、1987年の利根川進先生です。これは「多様な抗体を生成する遺伝的原理の解明」というテーマに与えられたものですが、このテーマの「抗体」こそが、柴三郎先生の発見した「抗毒素」の正体です。利根川先生の受賞の際には「北里が始めたことを、君が完結させた。おめでとう。」と祝電が届いたそうです。
そして、2015年には、北里大学の村大智先生が、「イベルメクチン」の功績で、ノーベル賞を受賞されました。小国郷でも大村先生にご講演い

受賞年	名前	写真	受賞テーマ
1987年	利根川進		多様な抗体を生成する遺伝的原理の解明
2012年	山中伸弥		様々な細胞に成長できる能力を持つiPS細胞の作製
2015年	大村智		線虫の寄生によって引き起こされる感染症に対する新たな治療法に関する発見
2016年	大隅良典		オートファジーの仕組みの解明
2018年	本庶佑		免疫チェックポイント阻害因子の発見とがん治療への応用

ノーベル生理学・医学賞を受賞した日本人